

エリザベス朝における騎士道文学と伝統の創造

大野雅子

騎士の存在が初めて文献に表われるのは、12世紀であるが、すでに15世紀には、馬上試合などの大掛かりな試合は姿を消しつつあった。ひとつには、馬上試合は、大勢の騎士たちが参加し、豪華な設備を必要とするため、敬遠されるようになったということ、もうひとつの理由としては、騎士道ロマンスの影響から、集団よりは、個人の力を競うものとしての騎士道というイメージが強まった、ということがあった。冒険を求めて国から国をさまよい、貴婦人に愛をささやく放浪の騎士のイメージのほうが、戦士としての騎士という本来のイメージを凌ぐこととなった。馬上試合、馬上槍試合などの騎士たちのための試合は、外国からの大使の来訪、戴冠式、王子王女の誕生などの儀式的な場面に限られるようになり、また、騎士道の場面が唯一の見世物というよりは、パレードや劇などと並列的に扱われるようになった。¹

Maloryの*Morte Darthur*を出版した出版者として知られる、William Caxton (ca. 1422-91)は、1484年に出版した、*The Book of the Ordre of Chyualry* (13世紀の初めにフランス人の女性作家 Raimon Llull によって書かれた *Libre del Orde de Cauyaleria* の翻訳)の冒頭で、人々(イギリスの騎士たち)に向かって、古き良き騎士道の時代、アーサー王の時代に帰ろうではないか、そして聖杯伝説やランスロットの物語やその他の騎士道の物語を読もうではないか

この論文は、2001年5月に学習院大学において開かれた、日本英文学会第73回大会で行なった口頭発表に、加筆訂正したものである。

¹ 15世紀における騎士道の役割に関しては、Barberに拠った。

と呼び掛ける。そのトーンは、ノスタルジックな調子を帯びている。

Oh ye knights of England, where is the custom and usage of noble chivalry that was used in those days [the days of King Arthur]? What do ye now but go to the bagnios and play at dice? And some not well advised use not honest and good rule against all order of knighthood. Leave this, leave it and read the noble volumes of the Holy Grail, of Launcelot, of Galahad, of Tristram, of Perseforest, of Percival, of Gawain and many more. There shall ye see manhood, courtesy, and gentleness.²

Stephen Hawes (fl. 1502-21)もやはり Caxton 同様、騎士道の時代をノスタルジーをもって眺めた人であった。Arthur Ferguson は次のように Hawes を評している。

For a romanticist he was, by temperament if not by circumstance. He loves the hazy atmosphere of chivalric romance. He makes the most of its emancipation from the precision of time and from the logic of plot. Perhaps, too, the ideals of chivalry appealed to him more for their archaism than for their immediate relevance³

1506年に書かれた *Pastyme of Pleasure* は、主人公の一生をアレゴリーの手法によって描いたロマンスである。Le graunde Amour という主人公は、Tower of Doctrine, Tower of Music, Tower of Chivalry, Tower of Chastity で教育を受けられ、3つの頭をもった怪獣をやっつけ、La Bell Pucell という美しい女性とめでたく結婚する。Age が彼のもとを訪れたとき、彼は自分が年をとったことを発見し、Death が訪れたとき、彼は死ななければならない。Mercy と Chastity

² Caxton 122-23.

³ Ferguson, *The Indian Summer of English Chivalry* 60-61.

が彼を葬り、Remembrance, Time, Eternity が彼の業績を永遠に人々の記憶に刻み込む。

Hawes の allegorical romance は、Edmund Spenser (ca. 1552-98) が *The Faerie Queene* を書くにあたって、大きな inspiration となった。1506 年の時点ですでに Hawes が騎士道に対してノスタルジックであったということを考えてみると、1593 年、Spenser が *The Faerie Queene* の 1 巻から 3 巻までを出版した時点で、騎士道がいかに時代錯誤的であったかということは容易に想像がつく。Spenser の友人、Gabriel Harvey (ca. 1550-1630) の手紙によると、Spenser は、同時代のイギリス社会に幻滅を感じ、古き良き時代を懐かしんでいたようである。

Sir, yower neue complaynte of y^e neue worlde is nye as owlde as Adam and Eve, and full as stale as y^e stalist fasshion that hath bene in fashion since Noes fludd. You crie owte of a false and treacherous worlde, and therein ar passage eloquent and patheticall in a degree above the highest.⁴

15 世紀にはすでに盛りを過ぎていた騎士道は、16 世紀後半、エリザベス 1 世が即位する頃までには、人々の日常生活からは完全に切り離されていた。騎士道衰退の理由として、Ferguson は 3 つ挙げている。ひとつには、封建社会が過ぎ去りつつあったということ。騎士道は、主人が家来を保護する代わりに家来が主人に忠誠を誓う、という構造を基本としていたからである。ふたつめには、商人階級の台頭とともに、貴族の権力が失われつつあったということ。3 つめには、humanism が騎士道に代わって人々に価値の基準を与えるようになってきた、ということ。Roger Ascham は、*Schoolmaster* の中で、Malory の *Morte Darther* のことを、「堂々とした人殺しとお下劣な猥談、このふたつが、この作品がもたらす喜びである」と述べている。Ascham や Thomas Elyot などの humanist たちは中世を通り越してギリシャ・ローマの時

⁴ Harvey 82-83.

代に戻っていった。その理想とするところは、放浪の騎士よりは、“governor”や“scholar-knight”であった。

そのような時代環境の中であって、Spenserは回顧的に中世を眺めていた。それは彼の性格でもあっただろうが、エリザベス朝という時代全体が、新しい価値観の中で、逆説的に復古的ムードにもあったのである。Emile Legouisは次のように言う。

The different attitude of Spenser is to some extent explained by the antiquarian tastes so widespread in England at the time—I mean the love of all the memories of the national past. It was the age of the chronicles Edward Hall and Holinshed, of the great antiquarian William Camden, of John Stow. The first deliberate attempt was being made to revive Anglo-Saxon . . . Spenser, then, lived in an atmosphere of heated patriotism favourable to the revival and glorification of all that pertained to the past of Great Britain.⁵

エリザベス朝は、Holinshedによって年代記が書かれた時代であって、人々がイギリスの過去を回顧的に眺めることを好んだ時代であったのだ。

このようなムードの中で、騎士道のイメージが様々な場面で使われたのであった。エリザベス女王は在位の間、様々な場所を訪れたが、エリザベスを歓迎するために騎士道のモチーフが使われることが多かった。そのひとつが、エリザベスがKenilworth城を1575年に訪れたとき、Leicester伯爵、Robert Dudleyが主催したentertainmentであった。ここでアーサー王伝説のモチーフがエリザベス朝において初めて公の場面で現われたのであった。Kenilworth城のentertainmentは、2種類の記録が残っている。Lanehamというロンドン市民が、目撃した様をロンドンの知り合いに宛てて書いたLaneham's Letterと、宮廷に仕えた詩人であり、このentertainmentの計画に参加し、いくつかの劇作品のシナリオを書いた、George Gascoigneが書いた*Princely Pleasure at the*

⁵ Legouis 57.

Courte of Kenilworth である。

1575年7月9日土曜日、エリザベスは Kenilworth に到着した。城に近づくと、「白い美しい絹の衣装に身を包んだ」10人のシビラ（魔女）がエリザベスに進みより、そのうちのひとりがエリザベスの未来を予言した。Gascoigneはその詩を記している。

All hayle, all hayle, thrice happy Prince; I am *Sibilla* she,
Of future chaunce, and after happ, forehsewing what shall be.
As now the dewe of heavenly gifts full thicke on you doth fall,
Even so shall Vertue more and more augment your years withal.
The rage of Warre, bound fast in chaines, shall never stirre ne move:
But Peace shall governe all your daies, encreasing subjects love.
You shall be called the Prince of peace, and peace shal be your shield,
So that your eyes shall never see the broyls of bloody field.
If perfect peace then glad your minds, he joyes above the rest,
Which doth receive into his house to good and sweet a guest.⁶

エリザベスは、「血なまぐさい戦さを2度と見ることはないだろう」（8行目）と、永遠の平和を予言される。しかし、ここで注目したいのは、次の9行目から10行目にかけて、その平和というのが、この *entertainment* の主催者を喜ばせるものと言われることである。その中でエリザベスは、「美しく良きお客」（“good and sweet a guest”）として表現され、国の平和の予言が、家庭の平和に規模が縮小され、エリザベスは Leicester にとっての「女性」として巧妙に位置づけられる。

エリザベス女王の歓迎、という意図が微妙に揺れ動く瞬間は、この他にもいくつか見られる。シビラの歓迎を受けたあと、エリザベスは第一の門に向かう。そこには巨大なトランペットをもった6人の巨大なトランペット奏者

⁶ Gascoigne 59.

がいた。Laneham の手紙はこの場面を次のように描写する。

theez Trumpetourz, being sixe in number, wear every one an eight foot hye, in due proportion of parson beside, all in long garments of sylk suitable, each with hiz silvery Trumpet of a five foot long, formed taper wise, and straight from the upper part unto the neather eend: whear the diameter was a 16 ynchez over, and yet so tempered by art, that being very easy too the blast, they cast foorth no greater noyz nor a more unpleazaunt soound for time and tune, than any oother common Trumpet, bee it never so artificially formed.”⁷

Gascoigne のほうは、この dumb show の意図を説明して、アーサー王の時代には人間がこのように巨大であったが、その頃の巨大さをここ Kenilworth は回復した、と言う。Leicester は、自らをアーサーにたとえることによって、アーサー王が自分の祖先であるという印象を作り上げようとしたのであった。このように dumb show をアレゴリーとして解釈するのは、Gascoigne のテキストだけであって、Laneham は見たことそのままを写し出しているだけである。Gascoigne の、Leicester におもねる気持ちが、エリザベスを歓迎する気持ちと微妙に交錯し、2重の意味を奏でているところである。Leicester 自身が、エリザベスの家臣であり、また求愛者でもある、という曖昧な位置にいたことと重なって、Kenilworth 城の entertainment は微妙な色彩を描く。

Kenilworth という場所そのものが、微妙な場所であった。1563年にエリザベスが Leicester に与えたもので、エリザベスは、その土地が利益をもたらすまで、Leicester に、年間 1000 ポンドの年金を与えたほど、Leicester を寵愛していた。Leicester は、彼の妻、Amye Robsart が生きている頃から、エリザベスの花婿候補として期待されており、Amye が亡くなったときには、彼が毒殺したのではないか、という噂が流れたほどであった。エリザベス自身も、「もし国内から夫を選ぶとするならば、Robert Dudley を選ぶであろう」と言った

⁷ Laneham 59.

ことがあるほどであった。ふたりの国民的ロマンスは、Spenserが、*The Faerie Queene*において、GlorianaとArthurとして描いたほど、国民的なものであった。結局ふたりが結婚しなかったのには、様々な理由が考えられる。一国の女王としてエリザベスは自由に相手を選べる立場にはなかったということ。フランスやスペインの王子と結婚したほうが、政治的利益につながるということ。Leicesterはそうこうするうちに、Lettice Knowlesという、別の女性と密かに結婚し、女王の怒りをかったということ。

しかし、エリザベス朝の宮廷人にとって、女王に対して愛を語ることは、まず第一にメタファーであったのだ。Leicesterは、エリザベスと結婚するのではないかと人々に思わせたという点で、ほとんど唯一の例外であった。次に女王の前に現われたのは、Robert Devereux、Essex伯爵であった。彼が17歳、彼女が51歳のときであった。人々は、Leicesterのときのように、ふたりが結婚するだろうとは想像しなかったが、女王のロマンスというアイデアは、人々が好むところのものであった。Essexが1589年にポルトガル遠征から帰ってきたときの熱狂振りが、George Peeleの詩によく表われている。

Fellow in arms he was in their flow'ring days
 With that great shepherd, good Philisides;
 And in sad sable did I see him dight,
 Moaning the miss of Pallas' peerless knight;
 Iô, iô paeant!
 But, ah for grief! That jolly groom is dead,
 For whom the Muses silver tears have shed;
 Yet in this lovely swain, source of our glee,
 Mun all his virtues sweet revive be;
 Iô, iô paeant!⁸

⁸ Peele 272-73.

この詩に語られているように、遠征で亡くなった Philip Sidney (“that great shepherd, good Philisides”) の、「理想的な宮廷人」というイメージが、Essex に受け継がれたのであった。

ロマンス物語の騎士としての彼のイメージがよく写し出されているのは、1590年代に Nicholas Hilliard が描いた miniature (小型の人物像) である。“The Young Man amongst the Roses” という題名の miniature が描いているのは、茶色の巻毛で口ひげが生え始めたばかりの背の高いハンサムな若者が、右手をマントの下、心臓のあたりにおき、左手の木に寄り掛かっている姿である。彼は物思いにふけているようだ。彼が着ているのは、黒いマント、袖飾り、シャツの首回りのフリル、ストッキング、靴は白く、ダブレットは白と黒だ。白と黒は、馬上槍試合の際、エリザベスの護衛をする者たちが着た色であり、また、宮廷仮面劇において、エリザベスのダンサーたちが着た色でもあった。また、若者を覆っているバラは、5枚葉がついた“eglantine” と呼ばれる種類のバラで、バラ戦争におけるヨーク家とランカスター家の闘争を克服した女王としてのエリザベスのシンボルとして用いられることが多かった。このように、“The Young Man amongst the Roses” が描いているのは、女王に恋をしている若者としての Essex であるということがわかる。⁹

Essex は女王に恋をする若者として描かれたが、それのみならず、彼自身がソネットを書いて、女王に対する恋を表現したのであった。Sir Henry Wotton が宮廷の日常を書きとめた本の中の一節にそのことが記されている。

my Lord of Essex chosess to evaporate his thoughts in a Sonnet (being his common way) to be sung before the Queen, (as it was) by one *Hales*, in whose voice she took some pleasure, whereof the complot, methinks had as much of the Hermit as of the Poet,

And if thou should' st by her now be forsaken

*She made thy Heart too strong for to be shaken.*¹⁰

⁹ “The Young Man amongst the Roses” に関しては、Strong に拠った。

¹⁰ Wotton 165.

Essex のソネットにはたとえば次のようなものがある。

Whilst all the swarm in sunshine taste the rose;
On black fern's root I seek and suck my bare:
Whilst on eglantine the rest repose
To light on wormwood leaves they me constrain;
Having too much they still repine for more
And cloyed with sweetness forfeit on their store.¹¹

ここでは、Essex がミツバチで、女王が eglantine にたとえられている。

Essex とエリザベスとの間の、“metaphoric love”において、Essex の側だけが恋をしていたのではなく、女王のほうも恋をする女性であった。その姿が描かれているのが、Sidney の *Arcadia* の中である。高慢で気の強い Corinth の女王、Helen である。第一巻で、Palladius と Clitophon が Helen の馬車を遠くから目撃する。行列全体が黒と白の2色だけである。馬車の中にいる女王は、美しい青年が描かれた絵を見ながら、悲しみに包まれている様子だ。その青年というのは、Amphialus で、その青年を探して、この Virgin Queen は旅をしているのであった。

Essex とエリザベスとの間のロマンティックな関係について考えてみると、それは、34歳の年の差を乗り越えた恋愛がすてきだということではなく、エリザベス朝時代において、エリザベスと宮廷人たちの間に存在した、構造的ロマンスとでも言うべきもののひとつだということであろう。Leicester とエリザベスとのロマンスもそうであった。Catherine Bates はこのことを次のように表現している。

Archetypally, the relation between Elizabeth and her courtiers reflected a moment in which a courtship had been artificially frozen—in which the

¹¹ Devereux 86.

‘lover’ and ‘beloved’ stood permanently on the threshold of a sexual relationship which would never be realized; and in which the cycle of reciprocity between an offer and its acceptance was arrested and suspended, creating the tense network of social, sexual, and political ties¹²

結婚が具体的な可能性として存在していたかどうか、ということが問題なのではなく、宮廷に仕える男たちと女王とはメタファーのレベルで恋愛関係にあったということである。このメタファーとしての恋愛関係を保つことが、エリザベスにとっては政治的戦略だったのである。宮廷人は宮廷風恋愛の常套句を飽きもせず口にし、そこにおいてエリザベスは常に美しく美德にみちた女性であった。集団的宮廷風恋愛ゲームにおいて現実の問題ではなかった。Bates が言うように、女王に対する欲望は決して報われないからこそ、常に欲望であり続けた。求愛する側と求愛される側との均衡によって恋愛の物語が語られ続けた。Bates は、“courtship”という言葉が、エリザベス朝時代に、もともとの、「宮廷に存在する」という意味に加えて、現代の「求愛」という副次的な意味をもつようになった、という指摘をする。「求愛」はエリザベスの宮廷人たちにとって重要な仕事のひとつであったのだ。

エリザベス自身、議会で行ったスピーチで、「自分はイギリスという国を夫としているのだ」と、メタファーとしての恋愛というアイデアを用いたことがある。¹³ Francis Bacon もまた、エリザベスは「宮廷人に求愛させているのだ」と言った。女性であるということは、男性中心社会において不利に働かなかねなかったが、エリザベスはそれを有利にもっていき、国民的恋愛の対象として自分のイメージを作り上げることによって、自分が女性であるということ、うまく利用したのだ。

Amorous politics はエリザベスにとっても、宮廷人の側にとっても、それぞれに好都合であった。エリザベスはロマンス物語の女王を気取り、宮廷人のほうは、女王に仕える騎士として自らを定義づけた。ともにロマンスの世界

¹² Bates 46-47.

¹³ “Speech 3, Version 2 1559. Her answer to [the Commons’] petition that she marry.”

をイギリスに現出させる結果となった。その際、アーサー王伝説に由来する物語群はかっこうのイメージを提供したが、エリザベスが初めてその主題を政治的に利用したのではなく、彼女の祖父と父、すなわち Henry 7 世と Henry 8 世もアーサー王伝説の物語を大いに利用し、アーサー王が Tudor 朝の祖先であるという物語をつくりあげることによって、Wales, Scotland, Ireland に対する優越性を保とうとしたのであった。それ以来アーサーは Tudor 朝の権力を表わす propaganda 的価値を帯びるようになったのであった。1148 年頃には完成していたとされる、Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britania* は、アーサーをイギリス建国の始祖とするが、エリザベス朝において、新たな人気を獲得した。アーサーが実在する人物かどうかということを取りざたするかわりに、人々は、イギリスがアーサーと円卓の騎士の功勞によってローマ帝国の支配から免れたということに熱狂した。長い間にわたるヨーク家とランカスター家の支配権争いを経て生まれた Tudor 王朝にとって、アーサー王は、政治的地場を固める上の良いイメージを提供してくれたのだ。

アーサー王とその騎士たちの物語、または騎士道のイメージを使うのは、このように、国家的関心に基づいたものであった。イギリス、またはヨーロッパ全体、世界のどの国々もおそらくは、この時代にまだ国家としての意識を育てるにはいたっていなかった。エリザベスの治世は、特に Scotland 女王の Mary を処刑したということ、その息子 James が Scotland からイギリスの王冠を狙っていたということ、などの事情によって、その国家的統一に対して不安な状態であった。しかし、Liah Greenfeld が言うように、エリザベス朝時代のイギリスにおいて国家的意識が芽生える要因がいくつか存在していた。ひとつには、humanism がもたらした、人間が理性的存在であり、国家に対する平等な参加者とする考え方であった。さらに、Protestantism は人々の間に読み書きの能力を広める結果となった。英語で書かれた文学作品が増えた、というよりは、作家たちがヨーロッパの他の国々の言語に対して英語という言語を擁護する必要を感じたようだった。

このような要素が重なりあうことによって、エリザベス朝において、国家意識が芽生え始めていたのだ。Liah Greenfield は言う。

By 1600, the existence in England of national consciousness and identity, and as a result, of a new geo-political entity, a nation, was a fact.¹⁴

もちろん、エリザベス朝における nationalism はまだ生まれたばかりであり、本当の意味での nationalism は、19 世紀後半の帝国主義の時代を待たなければならない。Ernest Gellner は、19 世紀後半、産業革命の訪れとともに、読み書きの能力が流布し、high culture が全国的文化として出現したということ、Benedict Anderson は、印刷術の成熟によって多くの人々が本を手にすることができるようになったため、言語を共有している国民たちが自分たちの国をひとつの社会として想像することができるようになったということ、などを nationalism の出現の要因として挙げている。Hobsbawm and Ranger は、*Invented Tradition* の中で、ビクトリア朝時代に王族たちがロンドンの通りを伝統的な衣装を身にまとい練り歩く行事が行われたというのは、ロンドンが他のヨーロッパの都市、パリやローマなどに較べると道路は狭く整備されていないという事情を考慮すると、特殊だと考える。その理由は、イギリスはいち早く産業革命を成し遂げた国で、それだからこそ、急速な変化の只中で、イギリスの伝統の継続性を印象づける必用性を感じ、過去に戻り、現在が決して過去と切り離されているわけではない、ということを確認する必要性を感じたのだ、と論ずる。Nationalism は、国民文化の継続性を擁護しようとする運動と結び付きやすい。アーサー王伝説が nationalism 的要素と結び付いたというのは、1590 年に出版された William Segar の *The Book of Honor and Armes* という本の中で、アーサー王についての記述が航海王として知られた、Sir Francis Drake についての記述と隣り合わせになっている、ということからもわかる。Francis Drake がエリザベス朝の人々にとって同時代であったのと

¹⁴ Greenfield 30.

同様、アーサー王も決して伝説上の架空の王ではなく、生きていた人で、英国の栄光の礎を築いた人、として考えられていたのであった。

騎士道と騎士道ロマンスのイメージはエリザベスと貴族たちにとってイデオロギー的価値をもっていた。エリザベスにとっては、イギリスという国がアーサー王の昔から栄光に満ちた国であると内外に向かって誇示すること。また、貴族たちにとっては、力をつけつつあった商人階級に対して、自分たちが特権的階級であるということを再確認すること。彼らは過去に向かって歴史を遡り、騎士道の栄光を現在に再現した。それは現在を過去のイメージで装飾しなおしたのみならず、過去を新たに構築することにもなった。騎士道の世界、アーサー王と円卓の騎士の世界があたかもイギリスという王国の始源に存在し、そこから歴史がたゆむことなく直線的に進んでゆき、現在の栄光を形成しているかのように。エリザベス朝における騎士道は、騎士道がもはや実際には実践されなくなった時代にあって、現実とは直接的な関係のない、フィクションであったにもかかわらず、フィクションが形成されると、歴史へ再投影され、新たな歴史を構築した。騎士道のイメージは歴史的現実から独り立ちした。エリザベス朝における騎士道のリバイバルは、このように、過去に対する *romanticism* とともにやってきたのである。Ferguson は言う。

Revivals of chivalry would henceforth have to breathe an atmosphere in some degree charged with a romantic archaism.¹⁵

¹⁵ Ferguson, *The Chivalric Tradition in Renaissance England* 21.

Works Cited

Ascham, Roger. "Schoolmaster." English Works. Ed. William A. Wright. Cambridge: Cambridge UP, 1904.

Barber, Richard. The Knight and Chivalry. 1970; Woodbridge, Suffolk: The Boydell Press, 2000.

- - -. Tournaments: Jousts, Chivalry and Pageants in the Middle Ages. 1989; Woodbridge, Suffolk: The Boydell Press, 2000.

Bates, Catherine. The Rhetoric of Courtship in Elizabethan Language and Literature. Cambridge: Cambridge UP, 1992.

Bornstein, Diane, ed. The Book of Honor and Armes (1590) and Honor Military and Civil (1602). By Sir William Segar.

Caxton, William. The Book of the Ordre of Chyualry. Ed. Alfred T. P. Byles. Vol. 168 of Original Series of Early English Text Society. 1484; London: EETS, 1926.

Cornish, F. Warre. Chivalry. London: Swan Sonnenschein & Co., LIM, 1901.

Devereux, Robert. "The Buzzeinge Bee's Complaynt." The Poems of Robert Earl of Essex. Ed. Alexander. B. Grosart. Vol. 4 of Miscellanies of the Fuller Worthies' Library, London, 1872.

Elizabeth I. "Speech 3, Version 2 1559. Her answer to [the Commons'] petition that she marry." Elizabeth I: Collected Works. Ed. Leah S. Marcus, Janel Mueller, and Mary Beth Rose. Chicago and London: the University of Chicago Press, 2000.

Ferguson, Arthur. The Indian Summer of English Chivalry. Durham, NC: Duke UP, 1960.

- - -. The Chivalric Tradition in Renaissance England. Washington: Folger Books, 1986.

Frye, Susan. Elizabeth I: The Competition for Representation. New York and Oxford: Oxford UP, 1993.

Gascoigne, George. Princely Pleasures at the Courte at Kenelwoorth. The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth. Ed. John Nichols. Vol. 1. London: John Nichols, 1823.

Girouard, Mark. The Return to Camelot: Chivalry and the English Gentleman. New Haven and London: Yale UP, 1981.

Greenfeld, Liah. "God's Firstborn: England." Nationalism: Five Roads to Modernity. Cambridge, MA, and London: Harvard UP, 1992.

Harvey, Gabriel. Letter-Book of Gabriel Harvey, A. D. 1573-1580. Ed. Edward J. L. Scott. Vol. 23 of New Series of Early English Text Society. London: EETS, 1884.

Hawes, Stephen. Pastime of Pleasure. Ed. W. E. Mead. Vol. 173 of Original Series of Early English Text Society. London: EETS, 1928.

Hobsbawm, Eric and Terence Ranger, eds. The Invention of Tradition. Cambridge: Cambridge UP, 1983.

Laneham's Letter. The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth. Ed. John Nichols. Vol. 1. London: John Nichols, 1823.

Legouis, Emile. Spenser. London & Toronto: J.M. Dent and Sons LTD; New York: E.P.Dutton and Co., 1926.

Peele, George. "An Eglogue Gratulatorie." Works. Ed. Bullen. Vol. 2. London: Nimmo, 1880.

Prestage, Edgar, ed. Chivalry: A Series of Studies to Illustrate Its Historical Significance and Civilizing Influence. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd.; New York: Alfred A. Knopf, 1928.

Wotton, Sir Henry. Reliquiae Wottoniae. London: B. Tooke, 1685.